とうとうお金がなくなってしまいました。

ところが、1632年、との様が加藤明成にかわり、開田に力を入れるようになり、内蔵之助の工事を助けることになりました。そして、1936年、ついに猪苗代湖の水を引くことができました。

工事が始まってから14年目のことでした。

高野下、稲荷原、生井、十一軒、六軒、漆沢、八田野などに新しく田を開くことができ、米もたくさんとれるようになりました。

そして、との様から、その手がらをほめられ、内蔵之助の家は、村の名の「八田」の姓を名のることがゆるされました。

これが、「八田堰」です。

その後、何度かほり進められ、城下町若松の慶山村までえん長され、湯川にそそぐ大きな堰となり名前も「戸ノ口堰」とあらためられました。

江戸時代		
一六二三	（三七五年前）	八田内蔵之助、戸ノ口工事はじまる仕事をした人　二万人→との様がかわり二年で中止
一六二四	（三七四年前）	この年凶作
一六三二	（三六六年前）	ふたたび、戸ノ口堰工事始まる。仕事をした人数万人
一六三六	（三六二年前）	戸ノ口堰を完成（高野下、稲荷原、生井、十一軒、六軒、漆沢、八田野に新しく田を開く）
一六四三	（三五五年前）	会津地方に四十二の新田ができる。
一六五七	（三四一年前）	花積弥市、なべ沼から金堀まで（十キロ）堰をつくる
一六九三	（三〇五年前）	古川そうじ之門が、金堀～滝沢～飯盛山の北西をまわって、慶山を通って城下まで堰をつくった。
一七二八	（二七〇年前）	四度の大こうずい。ひがいが大きい。
一七四九	（二四九年前）	農民いっき、打ちこわし
一七七四	（二二四年前）	この年ききん
一七八二～	（二一六年前）	三年間米がとれない。天明の大ききんとなる
一八三三～		大凶作　二千五百人もが死する 天保の大ききんとなる。四年つづきの大凶作　多くの人が死する
一八三三	（一六五年前）	佐藤豊助を中心として、戸ノ口ぜきの改修工事始まる　①はばを広げる　②どう門をほる　③かりがね堰と合わせる
一八三五	（一六三年前）	戸ノ口堰できあがる。仕事をした人五万五千人
一八六八	（一三〇年前）	ぼしん戦争で白虎隊、どう門を通る

▲　戸ノ口堰（八田野堰）年表